

茨城県教育財団文化財調査報告第207集

塙 谷 津 遺 跡

霞ヶ浦湖北流域下水道小川幹線玉里ポンプ場
土木・建設工事事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成15年3月

茨城県霞ヶ浦流域下水道事務所
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財團文化財調査報告第207集

塙谷津遺跡

霞ヶ浦湖北流域下水道小川幹線玉里ポンプ場
土木・建設工事事業地内埋蔵文化財調査報告書

平成15年3月

茨城県霞ヶ浦流域下水道事務所
財團法人 茨城県教育財團

序

茨城県は、21世紀における県勢のさらなる発展と県民生活の一層の向上を図るため、平成12年12月に茨城県長期総合計画を改定し、清らかな水の再生に向けた総合的な水質浄化対策を推進しております。その一環として、霞ヶ浦の水質保全と流域の生活環境の整備がまさに進められているところです。

このたび、茨城県霞ヶ浦流域下水道事務所は、玉里村塙地区において、霞ヶ浦湖北流域下水道小川幹線ポンプ場の土木・建設事業を計画いたしました。その予定地内には塙谷津遺跡が所在しております。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県霞ヶ浦流域下水道事務所と埋蔵文化財発掘調査事業についての委託契約を結び、平成13年9月に塙谷津遺跡の発掘調査を実施してまいりました。この調査によって貴重な遺構、遺物が検出され、郷土の歴史を解明する上で多大な成果をあげることができました。

本書は、塙谷津遺跡の調査成果を収録したものであります。本書が学術的な研究資料としてはもとより、教育、文化の向上の一助として広く活用されることを希望いたします。

なお発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県霞ヶ浦流域下水道事務所から多大なる御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

また茨城県教育委員会、玉里村教育委員会をはじめ、関係各機関及び関係各位からいただいた御指導、御協力に対し、衷心より感謝の意を表します。

平成15年3月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 斎藤 佳郎

例　　言

- 1 本書は、茨城県霞ヶ浦流域下水道事務所の委託により、財団法人茨城県教育財團が平成13年度に発掘調査を実施した、茨城県新治郡玉里村大字上玉里字塙に所在する^{うなづ}谷津遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 当遺跡の発掘調査期間および整理期間は、以下の通りである。

調　　査	平成13年9月1日～平成13年9月31日
整　　理	平成14年12月1日～平成14年12月31日
- 3 当遺跡の発掘調査は、調査第二課長鈴木英治の指揮のもと、調査第2班長矢ノ倉正男、主任調査員藤田哲也が担当した。
- 4 当遺跡の整理および本書の執筆・編集は、整理第一課長川井正一の指揮のもと、主任調査員荒藤克一郎が担当した。
- 5 発掘調査及び整理に際し、御指導、御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

凡　例

1 当遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第Ⅷ系座標を用いて区画し、X軸 = +17,960m, Y軸 = +46,020m の交点を（A 1a1）とした。なお、この原点は日本測地系による基準点である。

調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西、南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA, B, C…、西から東へ1, 2, 3…とし、その組み合わせで「A 1区」「B 2区」のように呼称した。さらに、小調査区も同様に北から南へ a, b, c…j、西から東へ1, 2, 3…oと小文字を付し、名称は大調査区の名称を冠し、「A 1a1」、「B 2b2」のように呼称した。

2 抄録の北緯及び東経の欄には、世界測地系に基づく緯度・経度を（　）を付けて併記した。

3 遺構、遺物、土層に使用した記号は、次のとおりである。

遺構　　土坑 - S K

遺物　　土器 - P 石器・石製品 - Q 拓本記録土器 - T P

土層　　擾乱 - K

4 遺構及び遺物の実測図中の表示

 繊維土器

● 土器 □ 石器・石製品 △ 碑 ○ 堅果類（クルミ） ▲ 木片

5 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。

6 遺構・遺物実測図の掲載方法については、以下のとおりである。

(1) 遺跡全体図は縮尺150分の1とし、遺物包含層の全体図は100分の1、土層断面図は80分の1、また土坑の実測図は60分の1の縮尺で掲載した。

(2) 遺物は、原則として3分の1の縮尺で掲載した。種類や大きさにより異なる場合もあり、それらについては個々に縮尺をスケールで表示した。

7 遺物観察表の記載方法は次の通りである。

(1) 土器の計測値の単位はcmである。なお現存値は（　）で、推定値は〔　〕を付して示した。

(2) 備考の欄は、土器の現存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号については、土器、拓本のみ掲載の土器片、石器・石製品ごとに通し番号とし、挿図、観察表、写真図版に記した番号は同一とした。

抄 錄

ふりがな	はなわやついせき							
書名	塙谷津遺跡							
副書名	霞ヶ浦湖北流域下水道小川幹線玉里ポンプ場土木・建設工事事業地内埋蔵文化財調査報告書							
卷次								
シリーズ名	茨城県教育財团文化財調査報告							
シリーズ番号	第207集							
編著者名	荒尋 克一郎							
編集機関	財團法人 茨城県教育財團							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029(225)6587							
発行機関	財團法人 茨城県教育財團							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029(225)6587							
発行年月日	2003(平成15)年3月26日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな在地	コード	北緯	東經	標高	調査期間	調査面積	調査原因
塙谷津遺跡	茨城県新治郡玉里村大字上玉里字塙2972番地の1ほか	8462 - 125	36度 09分 37秒 36度 09分 48秒	140度 20分 41秒 140度 20分 29秒	4m ~	20010901 ~ 20010931	188.86m ²	霞ヶ浦湖北流域下水道小川幹線玉里ポンプ場土木・建設工事に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
塙谷津遺跡	包藏地	縄文時代前期 奈良時代	遺物包含層 土坑	縄文土器(深鉢), 石器(石皿・磨石), 刃片 須恵器(蓋)				

目 次

序

例 言

凡 例

抄 錄

第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 調査の成果	6
第1節 遺跡の概要	6
第2節 遺構と遺物	7
1 土坑	7
2 遺物包含層	8
第3節 まとめ	11

付 章

写真図版

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

茨城県霞ヶ浦流域下水道事務所は、新治郡玉里村上玉里地区において、霞ヶ浦湖北流域小川幹線玉里ポンプ場の土木・建設工事を進めていた。

工事に先立ち、平成13年4月10日、茨城県霞ヶ浦流域下水道事務所長から茨城県教育委員会教育長あてに、霞ヶ浦湖北流域下水道小川幹線玉里ポンプ場土木・建設工事地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会があった。照会を受けて茨城県教育委員会は、平成13年4月26日に現地踏査、平成13年5月1日に試掘調査を実施し、平成13年5月8日、茨城県教育委員会教育長から茨城県霞ヶ浦流域下水道事務所長あてに、事業地内に墳谷津遺跡が所在する旨回答した。平成13年5月14日、回答を受けた茨城県霞ヶ浦流域下水道事務所長から茨城県教育委員会教育長あてに、文化財保護法第57条の3に基づく土木工事等の通知が提出された。これに対し、平成13年5月23日、茨城県教育委員会教育長から茨城県霞ヶ浦流域下水道事務所長あてに、工事により埋蔵文化財に影響が及ぶことになるため、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。平成13年7月3日、茨城県霞ヶ浦流域下水道事務所長から茨城県教育委員会教育長あてに事業地内における埋蔵文化財（墳谷津遺跡）の取り扱いについて協議書が提出された。その後、平成13年7月4日、茨城県教育委員会教育長から茨城県霞ヶ浦流域下水道事務所長あてに、発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて調査機関として、財團法人茨城県教育財團を紹介した。

茨城県教育財團は、茨城県霞ヶ浦流域下水道事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業についての委託を受け、平成13年9月1日から平成13年9月31日にかけて墳谷津遺跡の発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査経過

墳谷津遺跡の発掘調査は、平成13年9月1日から平成13年9月31日までの1か月間実施された。以下、調査の経過について、その概要を表で記載する。

項目	9月			
	第1週	第2週	第3週	第4週
調査準備 表土除去 道構確認				
グリッド試掘 及び 遺構調査				
遺物洗浄 注記作業 写真整理				
補足調査 及び 後片付け				

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

塙谷津遺跡は、茨城県新治郡玉里村大字上玉里字塙2972番地の1ほかに所在している。

遺跡のある玉里村は、筑波山塊から南東に向かって緩やかに傾斜しながら延びる洪積台地の東端に位置し、南域は霞ヶ浦、東域は南流する園部川に隔離され、霞ヶ浦に突き出た半島の形状を呈する。村内の地形は、玉里台地と総称される洪積台地群、園部川河口右岸に広がる沖積低地及びそこから北西方向に展開する大小の谷津からなる。これらの谷津は樹枝状に台地を開析しており、谷津頭と台地との比高は約20m、谷津の入り口付近で約10mを測る。当遺跡は、こうした谷津が広域氾濫源をなす沖積低地から入り込む入り口にあたる標高約4mに立地しており、隣接する台地との比高は約11mである。遺跡周辺の土地利用状況は、主として蓮田を含めた水田であり、台地上は畑地や果樹園となっている。遺跡の調査前現況は水田であった。

第2節 歴史的環境

遺跡の分布調査や発掘調査により、多数の遺跡が数えられ、この地方が古くから多くの人々の生活の場であったことが明らかになっている。塙谷津遺跡では、縄文時代前期及び奈良・平安時代の遺物が確認されており、周辺にも該期の遺跡は数多く確認されていることから、その有機的な関連性がうかがわれる。ここでは、当遺跡に関連する縄文時代と奈良・平安時代の主な遺跡を中心に述べることとする。

縄文時代の玉里地方は、海進のため台地を開析する谷津には海水が進入していたと考えられており、海の豊かな恵みを受け、早くから人々が生活を営んでいたことが部貝塚（4）、宵後貝塚（7）、八幡脇貝塚（6）等の存在からもうかがえる。

縄文時代早期～前期の遺跡は数多く確認されており、玉里地区のほぼ全域、特に台地上及びその様辺に立地している。該期の遺物が確認されている遺跡には、八幡脇貝塚、宵後貝塚、館山遺跡（60）、霞ヶ浦遺跡（淹台古墳群）（9）、山田峯遺跡（50）、平内遺跡（3）、高井谷津遺跡（16）、須合谷津遺跡（43）、宮平遺跡（11）、千部塚遺跡（17）、高崎城址（2）、稚現平古墳群（14）などがある。これらの遺跡で集落が形成されているものは現在のところ調査例はない。高崎城址からは縄文時代前期の地点貝塚が検出されており、霞ヶ浦を望む台地縁辺部にはこのような小規模な縄文遺跡があることが予想され、該期の遺跡群の動態を考え上で貴重な材料となっている。館山遺跡では、炉跡らしい遺構と縄文時代早期の地点貝塚が検出されており、ある程度拠点的な遺跡とも考えられる。最近の調査例では、栗又四ヶ（上郷）遺跡（5）で縄文時代早期～前期の陥穴1基が検出されている。

縄文時代中期は、海退のためほぼ現在に近い地形に変わり始めた時期にあたるが、谷津には依然として海水が進入しておらず入江の状況を呈していたと考えられ、中・西部の台地上を選んで集落を営んだ形跡が明らかである。該期の遺跡数は減少傾向にあるが、早～前期に比して規模の大きな遺跡が各所に出現する。栗又四ヶ（上郷）遺跡（5）、田木谷遺跡（8）、都室貝塚（4）、瓦ヶ台遺跡などがそれにあたる。また径3mほどの小形の住居跡が検出された中里遺跡（18）のように、臨時的な集落と考えられる遺跡も存在する。その他、縄文時代中期の遺物が出土している遺跡には、平内遺跡（3）、高井谷津遺跡（16）、天神下遺跡（15）、須合谷

津遺跡〈43〉、山内遺跡〈45〉、弥藏遺跡〈34〉などがある。

縄文時代後期には遺跡数が激減し、瓦ヶ台遺跡、五万堀遺跡、萬士峯遺跡、部室貝塚〈4〉、大井戸平遺跡〈10〉、平内遺跡〈3〉などに限定される。反面、遺跡の規模は飛躍的に拡大している。その典型となる部室貝塚からは、マガキ、アカニシ、ハマグリ、ハイガイ等の多量の貝殻や歯骨片、土器片のほかに加曾利B式期に編年される山形土偶が出土している。該期の拠点的な遺跡として確認されているのは、部室貝塚と五万堀遺跡のみであり、中期以前と比較して集落群の構造に変化が生じたことが想定される。

縄文時代晩期は、さらに遺跡数が激減し、部室貝塚を除けば規模も縮小し、数遺跡を数えるのみとなる。

弥生時代の遺跡数は少なく、縄文土器の分布域にわずかに弥生土器が出土するといった状況である。代表的な遺跡には、完形の甕が出土した福荷台遺跡〈36〉などがある。

古墳時代になると、玉里地方は、特に後期に至って大規模な前方後円墳を含む古墳の密集地帯となる。玉里村内で確認されている古墳の内、5~6割は後期古墳といわれており、この時期の古墳時代の一画期を見いだせる。代表的な古墳群として、権現平古墳群〈14〉、流台古墳群〈9〉、舟塚古墳群〈20〉、桃山古墳群〈51〉などがある。特に舟塚古墳は、明治大学による発掘調査により、若年人骨とともにガラス製の丸玉・小玉、唐草紋付銀製主頭大刀把頭、鹿骨製大刀把頭、その他多数の副品が出土したことで注目される。また古墳時代後期の集落遺跡としては、館山遺跡〈60〉、流台遺跡（流台古墳群）〈9〉、中里遺跡〈18〉のほか、祭祀遺跡と考えられる辻微窓地遺跡〈19〉などが挙げられる。

奈良・平安時代になると、当遺跡付近は、律令制度の確立に伴って常陸國茨城郡に属し、「和名抄」にみえる田余郷に比定されている。平安時代末期には茨城郡内が南北に二分され、当村域は南郡に属し鹿島神領となつた。該期の遺跡の調査例は多くなく、当遺跡の近辺で該期の遺物が出土している遺跡には、隣接する仲内遺跡〈37〉、田畑遺跡〈38〉、谷津上流域の福荷台遺跡〈36〉、中台遺跡〈32〉、低地に立地する釜神遺跡〈42〉、須合谷津遺跡〈43〉などがある。また宮平遺跡〈11〉からは、平成9年の発掘調査により、台地縁辺を巡る幅2m以上の溝跡が検出され、官衙的集落等の大規模遺跡の関連施設と考えられており、当地域における律令期の社会構造を考える上で重要な手がかりとなる。

註

- 1) 茨城県教育委員会「茨城県遺跡・古墳発掘調査報告書」 1995年3月
- 2) 玉里村立史料館「船山遺跡発掘調査報告書—旧石器・縄文・弥生時代編」 玉里村教育委員会 1993年3月
- 3) 茨城県教育委員会「茨城県遺跡発掘調査報告書第11集」 2002年3月
- 4) 2) に同じ
- 5) 2) に同じ
- 6) 茨城県教育委員会「茨城県遺跡発掘調査報告書X」 1999年3月

参考文献

- ・玉里村史編纂委員会『玉里村史』 玉里村教育委員会 1975年3月
- ・竹内理三編『角川日本地名大辞典8茨城県』 角川書店 1983年
- ・玉里村立史料館『五万堀遺跡』 玉里村教育委員会 1997年10月
- ・玉里村立史料館『特別展図録 貝塚人の暮らす海』 1999年1月
- ・茨城県教育委員会『茨城県遺跡地図』 2001年3月



第1図 塙谷津遺跡周辺遺跡分布図（国土地理院「石岡」・「常陸高浜」）

表1 塙谷津遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代					番号	遺跡名	時代				
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平
		器	文	生	墳	平			器	文	生	墳	世
1	塙谷津遺跡	○			○		31	中台北遺跡	○		○	○	
2	高崎城址	○	○	○	○	○	○	32	中台遺跡	○	○		○
3	平内遺跡(塙山古墳群)	○		○	○	○	○	33	中台南遺跡	○	○	○	○
4	部室貝塚	○	○	○	○	○	○	34	弥藏遺跡	○		○	○
5	栗又四ヶ遺跡(上郡遺跡)	○	○	○	○	○	○	35	天神遺跡	○	○	○	○
6	八幡臨貝塚	○			○		○	36	稻荷台遺跡	○	○	○	○
7	宮後貝塚	○					○	37	仲内遺跡	○	○	○	○
8	田木谷遺跡(うちわ遺跡)	○	○	○	○		○	38	田畠遺跡			○	○
9	流台遺跡(流台古墳群)	○	○	○	○	○	○	39	飯塚遺跡	○		○	○
10	大井戸平遺跡	○		○	○	○	○	40	間ノ内遺跡			○	○
11	宮平遺跡	○	○	○	○	○	○	41	香取下遺跡	○	○	○	○
12	西平西根遺跡	○	○	○	○		○	42	釜持遺跡			○	○
13	原山館跡	○	○	○	○	○	○	43	須合谷津遺跡	○	○	○	○
14	椎現平古墳群	○	○	○	○	○	○	44	高内遺跡	○	○	○	○
15	天神下遺跡	○	○	○	○		○	45	山内遺跡	○		○	○
16	高井谷津遺跡	○		○		○	○	46	ヤギワ遺跡			○	○
17	千部塚遺跡	○	○	○	○	○	○	47	火の橋遺跡			○	○
18	中里遺跡	○		○	○	○	○	48	明見遺跡			○	○
19	辻微高地遺跡	○	○	○	○	○	○	49	ヒル沼遺跡			○	○
20	舟塚古墳群		○				○	50	山田峯遺跡	○	○	○	○
21	高野遺跡	○		○	○		○	51	桃山古墳群			○	
22	駒崎遺跡	○	○	○	○		○	52	小松館跡	○		○	○
23	山ノ神遺跡	○	○	○	○		○	53	桜塚遺跡	○		○	○
24	原田向遺跡	○					○	54	松山遺跡	○	○	○	○
25	細山遺跡	○	○		○		○	55	出口遺跡	○	○	○	○
26	大山遺跡	○	○	○	○		○	57	岩屋遺跡	○	○	○	○
27	沼田平遺跡	○	○	○	○		○	58	桜久保遺跡	○	○	○	○
28	東前遺跡	○	○		○	○	○	59	香取遺跡	○	○	○	○
29	稲荷遺跡	○		○	○		○	59	下平前遺跡	○	○	○	○
30	石橋遺跡	○		○	○		○	60	館山遺跡	○	○	○	○

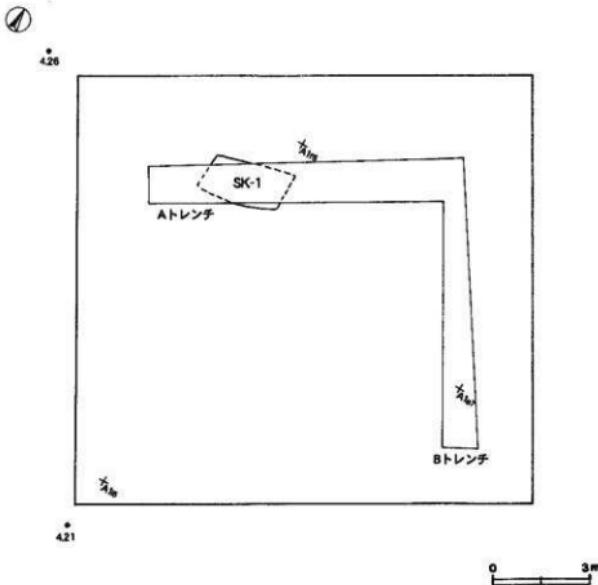
第3章 調査の成果

第1節 遺跡の概要

塙谷津遺跡は、新治郡玉里村の東部、園部川右岸の標高約4mの沖積低地縁辺部に立地している。調査区は西側の台地を開拓する谷津の入口にあたり、低湿な土地で、調査前の現況は水田である。調査面積は188.86m²である。

今回の調査では、奈良時代と考えられる土坑1基と縄文時代前期の土器片を含む遺物包含層1か所が検出されている。トレンチ試掘による土層断面から上層から中層は粘土層で、当時は水田跡を想定して調査を進めたが、水田面や畦畔の痕跡は認められなかった。下層の砂層と上・中層の粘土層との層界からは縄文土器片が相当数出土していることから、谷津内の上流域で該期の集落が形成されていた可能性が考えられる。

遺物は、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)で4箱分が出土した。遺物の大多数が遺物包含層から出土したもので、縄文時代前期前半の土器片を主体に、石皿、磨石、剥片、須恵器などが出土している。他には遺物包含層に流れ込んだような状態で多数の木片や堅果類(クルミ)及び礫が出土している。



第2図 塙谷津遺跡遺構全体図

第2節 遺構と遺物

1 土坑

第1号土坑（第3図）

位置 調査区の北部、A 14区。平坦な低地上に位置している。

確認状況 遺構確認のためA 14区を掘り下げた際、1の須恵器蓋片が出土した。Aトレンチの土層断面を確認したところ、人為的な掘り込みが確認されたため、平面的な広がりを確認するためAトレンチをはさんだ同区を精査したところ、長方形と推定されるプランの北西コーナー部と南東コーナー部が確認できた。

重複関係 第1号遺物包含層を掘り込んでいる。

規模と形状 Aトレンチにより大部分を掘り込まれているため明確でないが、残存する北西コーナー部と南東コーナー部の形状から、長軸2.68m、短軸1.44mほどの長方形と推定される。確認された底面はほぼ平坦である。また、確認された東壁及び北壁は外傾して、南壁は緩やかな傾斜で立ち上がっている。残存する壁高は12~20cmである。

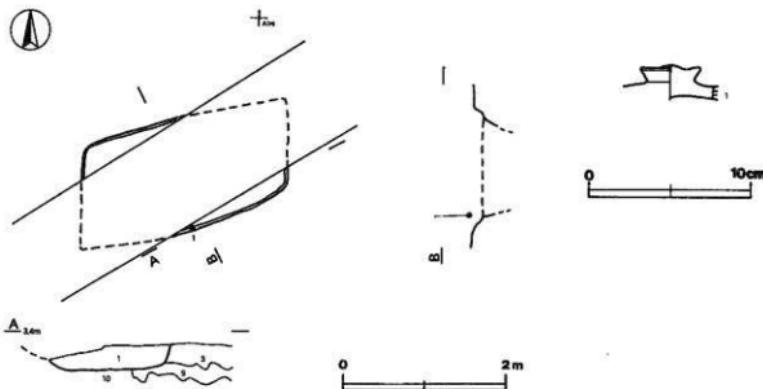
覆土 粘土による単一層である。周囲の粘土層よりも締まりがなく、色調を異にすることから、遺構の覆土であると判断した。均一な粘土粒子が堆積していることから、土砂の流入による自然堆積と考えられる。

土層解説

1 黒色 粘土粒子多量（やや締まりあり）

遺物出土状況 須恵器蓋片が1点出土している。1の須恵器蓋は、南壁際の上層から出土している。

所見 時期は、1の須恵器蓋から8世紀前葉と考えられる。



第3図 第1号土坑・出土遺物実測図

第1号土坑出土遺物観察表（第3図）

番号	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	胎上	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	須恵器	蓋	—	2.1	—	長石・石英	灰	普通	つまみ貼り付け後、ロクロナデ	南壁際上層	5% PL 5

2 遺物包含層

第1号遺物包含層（第4・5図）

位置 調査区全面に及んでいる。

確認状況 調査区全面が低湿な粘土層であり、上面からの確認は困難である。トレンチ及びグリッドを掘り下げた際、粘土層と砂層との層界から遺物の分布が確認できた。

重複関係 第1号土坑に掘り込まれている。

規模 範囲が調査区外に広がるため判然としないが、調査区一帯が谷津の入口にあたるため、広い範囲に広がっていると考えられる。

調査経過 調査区に平行して北側とそれに直交して東側にL字状に土層観察用トレンチを設定して調査を開始した。第8層から縄文土器片及び木片、堅果類（クルミ）が出土していることから、第8層を遺物包含層としてとらえ、同層上面まで掘り下げた。さらにトレンチの土層断面によって第8層下面に上記の遺物が顕著に出土していることから、調査区界と平行及び直交するA1区～E5区の2m四方の任意グリッドを設定し、交互に掘り下げ、遺物の平面的な広がりを記録することに努めた。

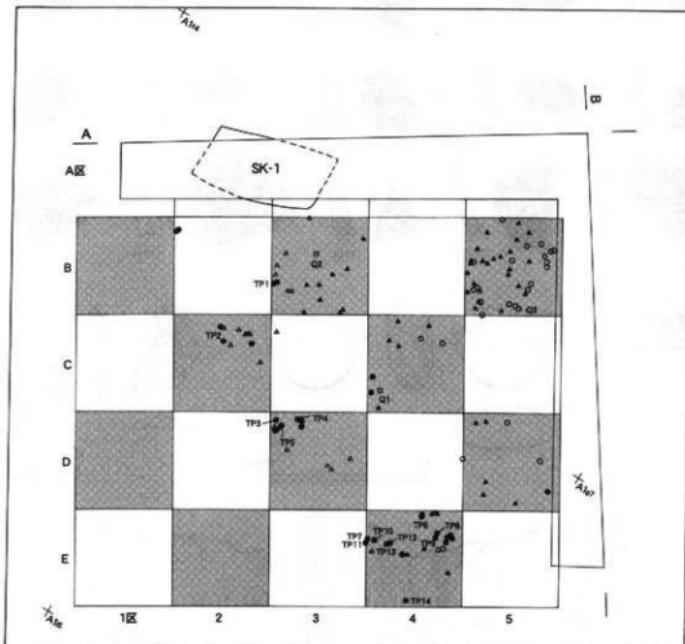
土層 13層に分層される。1は表土で、現代の水田耕作土である。砂を中量含む粘土層である第8層を層界にして、これより上層が粘土層、下層が砂層に大別できる。遺物の大半が第8層から出土しており、この層が遺物包含層ととらえることができる。また、第2・6・7層はBトレンチからのみ確認でき、北から谷津の人口に向かって流れ込んだと考えられ、特に第6層は、腐植土を多く含んでいる。また第13層は、第1号土坑の覆土である。

土層解説

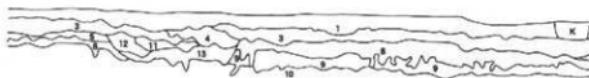
1	暗灰	色	鉄分を多量に含む粘土層（縮まりあり）	8	黒	色	砂を中量含む粘土層（縮まりあり）
2	黒	色	鉄分を中量含む粘土層（縮まりあり）	9	灰	色	砂質土（やや縮まりあり）
3	暗青灰	色	鉄分を少量含む粘土層（縮まりあり）	10	緑	灰	粘土粒子を少含む砂質土（縮まりあり）
4	青苔	色	鉄分を中量含む粘土層（縮まりあり）	11	黒	色	砂を中量含む粘土層（縮まりあり）
5	オリーブ黒	色	砂と鉄分を少量含む粘土層（縮まりあり）	12	暗緑	灰色	粘土層（縮まりあり）
6	黒	色	腐植土を含む粘土層（やや縮まりあり）	13	墨	色	粘土層（やや縮まりあり）

遺物 縄文土器片35点、石皿1点、磨石1点、剥片1点の他、礫26点、堅果類（クルミ）25点、木片109点が出土している。縄文土器はすべてが細片で、復元可能なものはなかった。層位的には、自然遺物を含めたすべての遺物が第6～9層から出土しており、その大半が第8層に集中している。平面的な出土位置には特異な傾向は認められない。また出土土器は摩滅・劣化が著しく、文様等は不明瞭なものが多いが、時期的な差異は認められない。堅果類（クルミ）等の自然遺物も土器とほぼ同時期に流れ込んだものと考えられる。

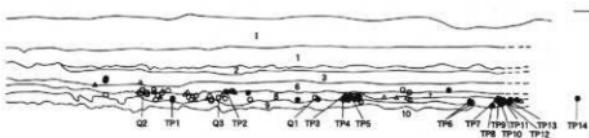
所見 調査区が谷津の入口にあたることから、同区に土砂とともに遺物が流れ込んできたものと考えられる。第6層に廐食上が多く含まれていることから、調査区南部は北西から下る谷津が南東に展開する広域氾濫源に広がる場所にあたり、上流の土砂が集積する状況にあったと想像され、沼地の様相を呈していたことが考えられる。上～中層が粘土層、下層が砂層という堆積状況からも、流入した遺物がその層界に集中する状況も想定でき、縄文時代前期前半の集落が谷津の上流域に形成されていたことが想起される。分布調査により当遺跡のある谷津が開析する台地上に所在する橋荷台遺跡や飯塚遺跡からは縄文土器が採集されており、これらの遺跡との有機的な関わりが推察される。



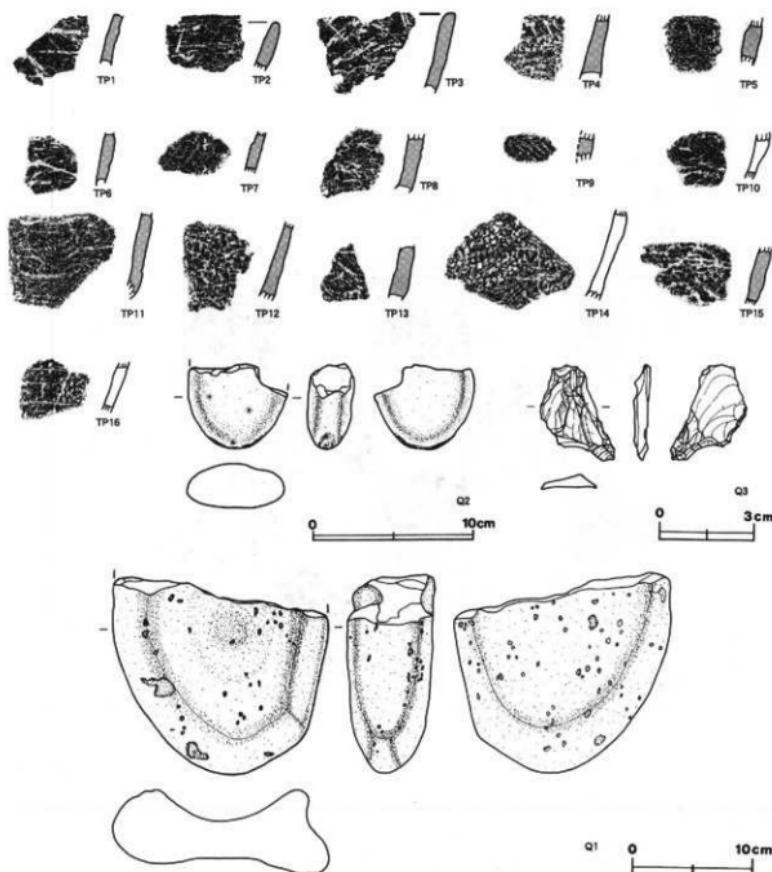
A 4.2m



B



第4図 第1号遺物包含層実測図



第5図 第1号遺物包含層出土遺物実測図

第1号遺物包含層出土遺物観察表（第5図）

番号	種別	器種	器形及び文様の特徴	出土位置	備考
TP 1 ～ 16	繩文土器	深鉢	TP1・2・4・10・12・13・15は沈縫を横方向に施す。TP3・8・11は櫛状工具による沈縫を施す。TP7・14はL Rの単節繩文を縱方向に、TP9はR Lの単節繩文を横方向に施す。TP16は半節繩文を施し、沈縫を横方向に施す。	第6・8層	前期前半 P L 5 TP10・14・16を除き 粘土中に纖維を含む

番号	器種	計測値			石質	特徴	出土位置	備考	
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)					
Q 1	石皿	(16.6)	18.1	7.1	(1451.6)	安山岩	両面及び片側面に縁を有し、機械面が凹む。	第8層	P L 5
Q 2	磨石	(5.3)	(6.2)	2.9	(103.8)	石英斑岩	端部にわずかな使用痕あり。	第6層	P L 5
Q 3	剥片	30	23	0.5	24	チャート	側面一方向からの打撃による横長剥片。	第8層	P L 5

第3節 ま　と　め

当遺跡からは、縄文時代前期の土器片を含む遺物包含層1か所と奈良時代の土坑1基が検出された。

当遺跡は園部川下流域の広域氾濫原の縁辺部に立地し、西側に開析された谷津の入口にある。現在、遺跡周辺には水田が広がっている。当初は水田跡の可能性があるとの想定のもとに調査を開始したが、調査の結果、水田面や畦畔の痕跡は認められなかった。また水田耕作の消長に関する情報を得ることを目的として、上層から下層の土をサンプリングし、植物珪酸体の産状についての科学分析を実施した。その結果、各層よりイネ属が検出されたものの、イネ属珪酸体の含量が極めて少ないとから、水田耕作土として利用されていた可能性は低いことが判明した。

調査区のはば全面に及ぶ遺物包含層からは、縄文時代前期前半（黒浜式期）の土器片及び石皿・磨石などの石器の他、堅果類（クルミ）、木片、礫がほぼ同じ層位に集中して出土している。この層が奈良時代の土坑に掘り込まれていることから、これらの遺物は奈良時代以前のある時期に谷津上流域から流れ込んだものと考えられる。また第6層に腐植土が多く含まれていること、第8層から上層が粘土層で第9層から下層が砂層であるという堆積状況から、当遺跡周辺がかつては沼地状の低湿地であったことが推察され、このような状況にあっては、上流域から流れ込んだ遺物が第8層と第9層の層界に集中することも十分に考えられる。これらのことから、当遺跡の所在する谷津の上流域に縄文時代前期の集落が形成されていた可能性があり、そこから遺物が流れ込み、谷津の入口にあたる当遺跡付近に集積し、遺物包含層が形成されたものと考えられる。

奈良時代の土坑に関しては、出土遺物から8世紀前葉と考えられるが、残存状況が悪く、遺物も少なかったため、性格は不明であった。

古代景観の復元は、台地に存在する遺跡のみならず、低地遺跡の立地や出土遺物からみた遺跡の時期等を検討していくことが必要である。少量ではあったが当遺跡からイネ属が検出されたことは、上流域で水田耕作が行われていた可能性を示唆しており、本地域周辺に分布する谷津内の土地利用の変遷を考えるうえで貴重な材料となった。低地遺跡については、遺跡が展開する以前の地形や、自然環境の変化や人為的な環境の変化が密接にかかわっているため、文献史学や歴史地理学、そして地形・地質学等の総合的な見地から検討しなければならない。その上で、周辺遺跡との有機的な関わり合いを探っていく作業が総合的な古代景観の復元につながっていくものと考えられる。

参考文献

- ・玉里村史編纂委員会『玉里村史』玉里村教育委員会 1975年3月
- ・玉里村立史料館『館山遺跡発掘調査報告書 旧石器・縄文・弥生時代編』玉里村教育委員会 1993年3月
- ・赤井博之『鬼怒・小貝川中流域における低地遺跡の基礎的研究』『茨城県史研究』第79号 1997年10月
- ・玉里村立史料館『特別展図録 貝塚人の暮らす海』 1999年1月

付 章

塙谷津遺跡の稲作の消長について

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

塙谷津遺跡は、石岡台地（経済企画庁総合開発局、1973）を開拓する小谷の開口部付近に位置する。今回の発掘調査では、古代の水田層と思われる土層が認められた。しかし、畦畔などの水田に関する施設の遺構が検出されず、考古学的には水田であると断定するには至っていない。

今回、稲作の消長に関する情報を得ることを目的として、堆積物中に含まれる植物珪酸体の種類と量を把握することにした。なお、稲作の消長を把握する上で土壤に混入した植物体量の目安を得るために、層位的に植物珪酸体含量を測定する。

1. 試料

試料採取地点の層序は、土色や層相より1層～13層に分層されている（図1）。下位の10層・9層は砂質土であり、地山である。その上位に、主に粘土で構成される8層～1層が認められる。この内、13・8層では、植物の根の痕跡と思われる管状炭化鉄が見られる。

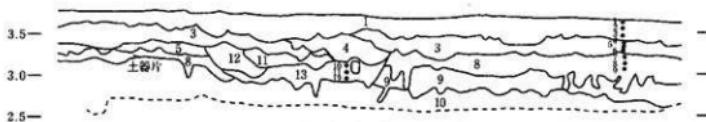


図1 試料採取地点の土層断面

発掘調査所見によると、8層が古代の水田層の可能性があるとされている。また、13層が土坑覆土であり、13層上面から8世紀代の須恵器が出土するとされている。なお、8層と9層の層界からは、流れ込みと見られる木片や縄文時代前期の土器片が出土している。

分析試料は、1・3・8層より採取された9点（試料番号1～9）、および土坑埋植物13層より採取された3点（試料番号10～12）である（図2）。

2. 分析方法

秤量した試料について、過酸化水素水と塩酸による有機物と鉄分の除去、超音波処理（70W, 250kHz, 1分間）による試料の分散、沈降法による粘土分の除去、ポリタングステン酸ナトリウム（比重2.5）による重液分離を順に行い、物理・化学処理で植物珪酸体を分離・濃集する。

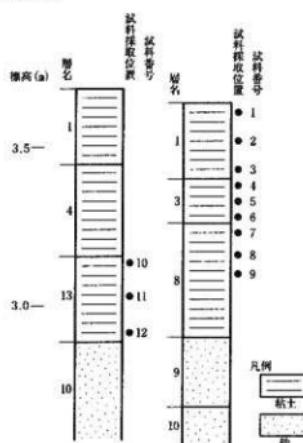


図2 試料採取地点の模式柱状図

これを検鏡し易い濃度に希釈した後、カバーガラスに滴下し、乾燥させる。その後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。なお、分析の際、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計測する。

検鏡は光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現するイネ科植物の葉部（葉身と葉鞘）の短細胞に由来する植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身の機動細胞に由来する植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、同定・計数する。なお、同定には近藤・佐瀬（1986）の分類を参考とする。

結果は、検出された植物珪酸体の種類と堆積物 1 gあたりの植物珪酸体量の一覧表で示す。また、各種類の植物珪酸体含量とその層位の変化から稲作の様態や古植生について検討するために、植物珪酸体群集の層位的変化を図示する。

3. 結果

結果は、表 1・図 3 に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、概して保存状態が悪く、表面に多数の小孔（消食痕）が認められる。

堆積物 1 g当たりに含まれる植物珪酸体の含量は層位的に変化し、試料番号 6～4で増加し、試料番号 4では約 13 万個/g と最も多いが、上位にむかって減少する。また、土坑覆土でも植物珪酸体含量は上位に向かって増加する。

栽培植物であるイネ属は、幾つかの試料から認められ、含量も層位的に異なる。試料番号 9・7 では、機動細胞珪酸体が約 50 個/g 検出される程度である。土坑埋積物では、上位の試料番号 10 で短細胞珪酸体が約 180 個/g、機動細胞珪酸体が約 270 個/g 程度検出される。試料番号 5～1 では、短細胞珪酸体が約 100～900 個/g、機動細胞珪酸体が約 600～3900 個/g 検出され、試料番号 3 で短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体とともに含量が多い。

この他に、タケア科、ヨシ属、ウシクサ族（コブナグサ属・スキ属を含む）、イチゴツナギア科などが検出される。この中では、タケア科とヨシ属の産出が目立つ。また、植物珪酸体の他に、珪藻の殻片や海綿骨針も數多く認められる。

表 1 植物珪酸体分析結果

単位：個/g

種類	試料番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
イネ科葉部短細胞珪酸体													
イネ科イネ属	72	205	887	291	120	0	0	0	0	181	0	0	0
タケア科ネザサ節	0	123	633	1018	600	940	122	344	122	453	368	173	173
タケア科	7511	7429	33949	37377	28920	16403	6037	5985	3628	21178	13255	9418	9418
ヨシ属	2516	2422	1441	25597	16920	9298	2796	4392	1957	11042	5431	2562	2562
ウシクサ族コブナグサ属	252	123	2534	436	120	104	0	43	0	272	0	86	86
ウシクサ族スキ属	395	698	4434	4363	1560	836	243	517	163	543	276	691	691
イチゴツナギア科	216	205	1013	291	360	104	0	129	41	181	0	86	86
不明	2803	2709	17735	13089	7080	6791	1945	2411	1019	5792	4142	3588	3588
イネ科葉身機動細胞珪酸体													
イネ科イネ属	755	575	3927	582	0	0	41	0	41	272	0	0	0
タケア科ネザサ節	0	164	760	727	1080	731	284	344	122	634	1105	346	346
タケア科	4456	7717	13103	30542	20520	14835	5875	4779	3791	16019	19333	6653	6653
ヨシ属	735	862	887	4072	3360	2298	1135	904	408	2534	10033	3197	3197
ウシクサ族	503	1149	4560	3927	2160	1358	770	646	367	1177	2025	1814	1814
シバ属	36	41	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
不明	2372	2709	8614	7854	6840	4910	1661	1378	530	3892	5891	6307	6307
合計													
イネ科葉部短細胞珪酸体	13764	13914	75625	82463	55680	34477	11143	13820	6929	39641	23472	16934	16934
イネ科葉身機動細胞珪酸体	8876	13217	33048	47703	33969	24134	9765	8051	5258	24527	38383	18317	18317
乾式	22640	27131	107674	130166	89640	58611	29090	21871	12187	61168	61855	35251	35251

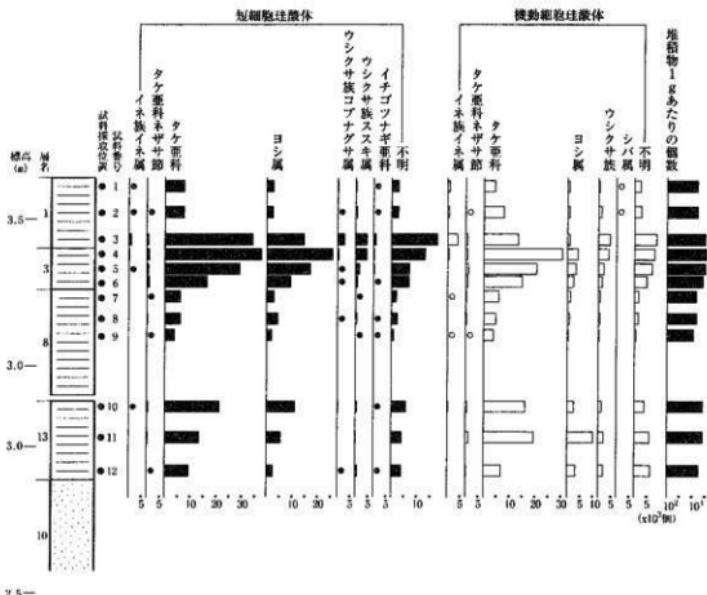


図3 植物珪酸体群集の層位的変化
堆積物乾燥重量1あたりに換算した個数を示す。
●○は、250個／g未満の出現を示す。

4. 考察

古代の水田層の可能性があるとされる8層からは、イネ属珪酸体が検出されたものの、機動細胞珪酸体が50個／g未満と、その含量がわずかであった。また、土坑埋積物13層上部においてもイネ属が検出されたが、短細胞珪酸体が200個／g以下、機動細胞珪酸体が300個／g以下であった。植物珪酸体分析において水田検証を行なう場合、機動細胞珪酸体の個数が5,000個／gを超えると、水田耕作土として利用していたと推定している例が多い（古環境研究所、1993;1994など）。一方、調査地点において、現水田層におけるイネ属の産状をみると、短細胞珪酸体が約100～900個、機動細胞珪酸体が約600～3900個／g含まれる。また、植物珪酸体群集の層位的な変化をみると、タケア科・ヨシ属・ウシクサ族など、イネ属以外の珪酸体の含量が著しく減少している。8層や13層での機動細胞珪酸体の含量は、現水田層と比較して極めて少なく、またイネ属以外の植物珪酸体含量が多い。さらに、1層～8層にかけては植物根の痕跡が認められた。これらの点を考慮すると、8層・13層が堆積した頃、本遺跡付近において稻作が行われていたとは考え難い。おそらく、8層や13層が堆積した頃、谷内は、溝渠な場所に比較的大型の水生植物であるヨシ属が生育し、また台地斜面部などにタケ・ササ類などが生育していたと考えられる。

2層になると、堆積物1g当たりに含まれる植物珪酸体の含量が、約58600～130000個／gと下位に比べて極

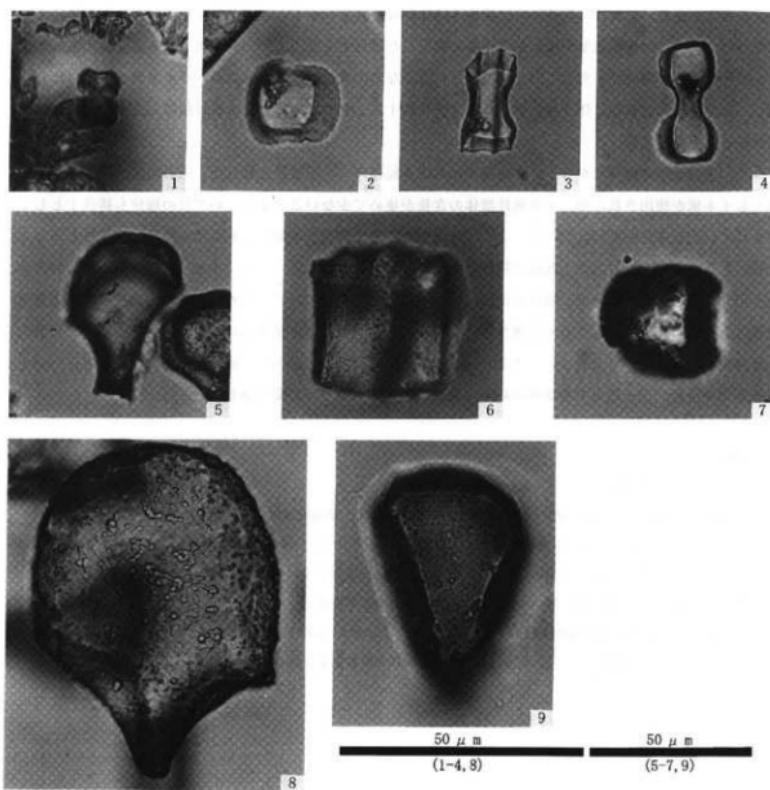
めて多くなる。検出される珪酸体を種類毎にみると、ある特定の種類が増加しているわけではなく、全種類が増加する傾向がある。これは、堆積物中に植物珪酸体が取り込まれやすい状態が存在していたことを意味する。すなわち、当時は、堆積速度が緩やかで比較的安定した環境であり、タケ・ササ類、ヨシ属、ススキ属などのウシクサ族などが周辺に生育していたと想定される。なお、本層では、上部においてイネ属が検出される。しかし、植物珪酸体が耕作に伴う擾乱によって下方移動することを考えると、本層堆積時も遺跡付近で稲作が行われていた可能性は低い。

以上、植物珪酸体の産状から、当遺跡周辺における稲作について検討を行った。その結果、13層・8層・3層ともイネ属が検出されたが、イネ属珪酸体の含量が極めて少ないとから、いずれの層位も耕作土として利用されていた可能性が低い。ただし、ここで検出されるイネ属が上流域から流れ込んできた可能性もあることから、当該期になると谷内の上流域で稲作が行われていたことも考えられる。本地域周辺に分布する谷内の土地利用の変遷を検証する上で、稲作の消長を把握することは重要であり、その意味で今回の調査結果は貴重な資料と言える。今後、花粉化石や珪藻化石の産状から、植生変化や堆積環境について検討を行い、この谷内の土地利用状況等について考えていくことが望まれる。さらに、この谷内の上流域や周辺の同様な谷についても同様な調査を行い、その上で当遺跡の結果を改めて評価することが必要である。

引用文献

- ・経済企画庁総合開発局（1973）「土地分類図08（茨城県）」。
- ・近藤鉢三・佐瀬 陞（1986）植物珪酸体分析、その特性と応用、第四紀研究、25、p31-64。
- ・古環境研究所（1993）V区における植物珪酸体（プラント・オパール）分析、「群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告書 第156集 元總社寺田遺跡工一級河川牛池川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第1集<遺構・遺物編>」、p.217-221、財團法人群馬県埋蔵文化財調査事業団。
- ・古環境研究所（1994）塙田遺跡付近のプラント・オパール分析、「塙野西道路群 塙田遺跡 - 長野県北佐久郡御代田町塙田遺跡発掘調査報告書-」、p.356-358、長野県御代田町教育委員会。

図版1 植物珪酸体



1. イネ属短細胞珪酸体(試料番号2)
2. ヨシ属短細胞珪酸体(試料番号7)
3. コブナグサ属短細胞珪酸体(試料番号3)
4. ススキ属短細胞珪酸体(試料番号7)
5. イネ属機動細胞珪酸体(試料番号2)
6. ネザサ節機動細胞珪酸体(試料番号8)
7. イネ属機動細胞珪酸体(試料番号7)
8. ヨシ属機動細胞珪酸体(試料番号7)
9. ウシクサ族機動細胞珪酸体(試料番号7)

写 真 図 版



調査区全景



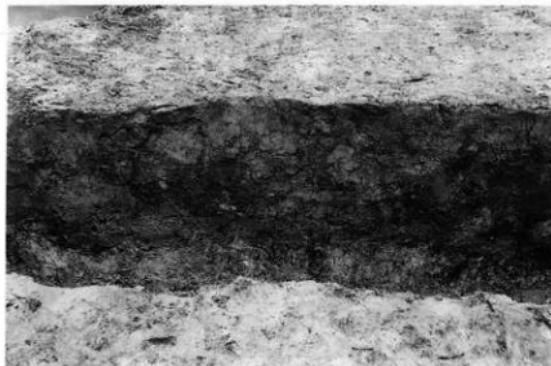
第1号遺物包含層土層断面（Bトレンチ北から）



第 1 号 土 坑
遺 物 出 土 状 況



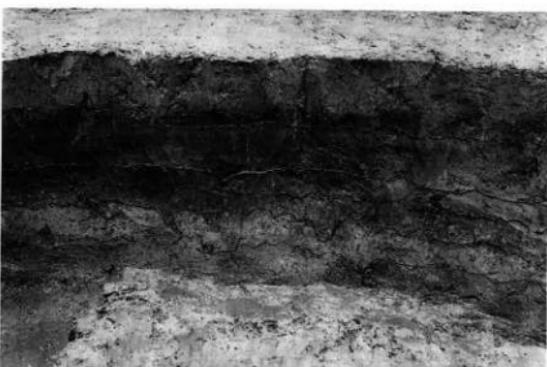
第 1 号 遺 物 包 含 層
土 層 断 面 (A トレンチ 西 部)



第 1 号 遺 物 包 含 層
土 层 断 面 (A トレンチ 中 部)



第1号遺物包含層
土層断面(Aトレンチ東部)



第1号遺物包含層
土層断面(Bトレンチ北部)



第1号遺物包含層
土層断面(Bトレンチ中央部)



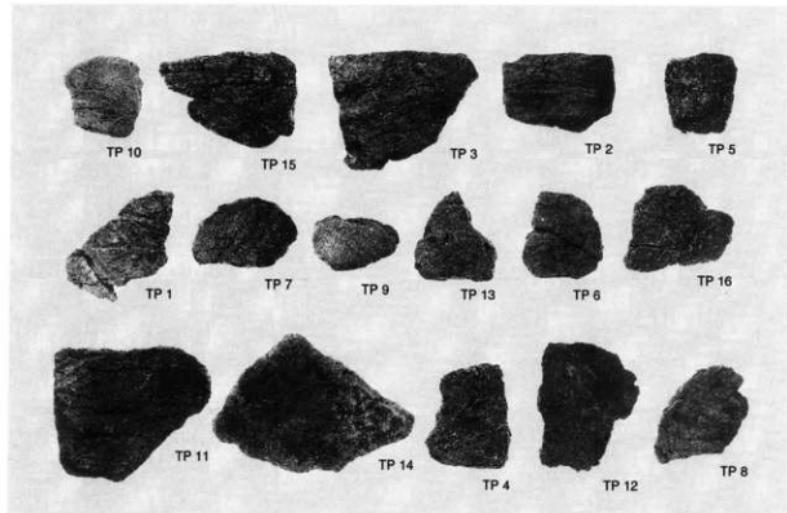
第1号遺物包含層
土層断面(Bトレンチ中央部)



第1号遺物包含層
土層断面(Bトレンチ南から)



第1号遺物包含層
石皿出土状況



第1号遗物包含层·第1号土坑出土遗物

茨城県教育財団文化財調査報告第207集

塙谷津遺跡

平成15(2003)年3月20日 印刷

平成15(2003)年3月26日 発行

発行 財團法人 茨城県教育財團

〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2

茨城県水戸生涯学習センター分館内

TEL 029-225-6587

印刷 ワタヒキ印刷株式会社

〒310-0012 水戸市城東1-5-21

TEL 029-221-4381